

氏名(国籍)	朱 衛 紅 (中 国)
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	博 甲 第 3519 号
学位授与年月日	平成 16 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	佐藤春夫論－社会へのまなざしと方法論の模索－

主 査	筑波大学教授	名 波 弘 彰	
副 査	筑波大学教授	博士 (文学)	荒 木 正 純
副 査	筑波大学教授	新 保 邦 寛	
副 査	筑波大学講師	平 石 典 子	
副 査	筑波大学講師	吉 原 ゆかり	

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、佐藤春夫の文学研究において、比較的研究蓄積の手薄な大正末期から昭和初期にかけての作品群を対象とし、それが従来の研究の見過ごしていた彼の「社会的小説」の方法の模索期に相当するものとして考察したものである。

従来の佐藤春夫論は、『田園の憂鬱』『都会の憂鬱』といった代表作で知られるように、小説世界を社会の現実から切り離し、孤高の人物の内面に視点を集中し、近代の憂鬱を詩情あふれる文体で掘り下げた、耽美的でロマンチズムあふれる作家として佐藤をとらえるのが通説であった。しかし本論文が考察する時期は文学史的に大きな転換を迎える時期にあたり、その時期の彼の作品には通説的な作風がうかがえない。そのために、ほとんど注目されることがなかった。

大正 12 年の関東大震災による都市機能の崩壊、また在日朝鮮人および社会主義者大杉栄の虐殺事件の発生、そして治安維持法の制定などに見られるように、都市市民の閉塞状況は極限にまで達しようとしていた。その一方で、ジャーナリズムや出版産業の発達にともなって、文化・文学の大衆化という現象もあらわれた。また大正 13 年頃からプロレタリア文学運動と新感覚派の文学思潮が、あたかも対抗するかのよう活発な展開をみせるようになる。このような時代の状況のなかで、既成文壇の作家たちは、芸術(文学)の意味を問い直さざるをえなくなった。その代表的作家である佐藤春夫は、こうした状況をしっかりと受けとめ、自身の文学がめざすべき方向を模索したとされる。本論文はこのような作家の新たな文学の模索を「社会的小説」の方法の模索にあったと認め、同時代の文化的コンテクストとの相関を主として追求しようとする。

本論文の構成と内容を紹介しますと、以下のとおりである。

第一部では大正 9 年におこなわれた台湾旅行を題材にして書かれた、いわゆる台湾物と呼ばれる作品群が考察されている。その問題意識は、エキゾティズムの背後に秘められた文化人類学的なまなざしがどのような契機から得られ、それが作品にどのように生かされているかというところにある。

第一章では『魔鳥』(大正 12 年)が考察される。台湾先住民の「蕃地」の種族社会が主人公の少女を悪魔のとりついた「魔鳥使い」とみなすことで、社会から排除するといった少女の悲劇のプロットが着目され、

そこに外部からの異端・異常の侵入を厳しく排除する社会のメカニズムの存在を認め、それを現代の文化人類学の知見をもちいながら分析する。そしてこの作品では、帝国主義と種族社会から二重に疎外される少女(女性)の悲劇が描かれると結論づけている。そして佐藤がこの社会の排除のメカニズムは「文明国」にもあると示唆していることを手がかりに、関東大震災によって混乱した日本社会が内部の異分子(朝鮮人、社会主義者)を排除した社会的ヒステリー現象を批判する意図があったとする。第二章では、『霧社』(大正14年)が考察される。帝国主義日本の官憲と結婚させられたり、日本人相手に売春せざるをえないがゆえに、種族社会からも「不浄」とみなされて排除された女性の、これまた二重の周縁化の悲劇を、『魔鳥』と同じく社会の構造分析を主として考察している。ただ「不浄」とされた女性たちに美を見る主人公のまなざしには都市の近代化過程とともに、周縁へと追いやられる文学者の閉塞状況が重ねられていると分析される。第三章では『女誠扇綺譚』(大正14年)が考察される。台南の港町にある廃屋の怪の謎解きをメイン・ストーリーとしているが、本論文では日本の文学者<私>と世外民という台湾知識人の対話の構造が分析される。両者は<同文同種>といった中国古典の教養を共有してはいても、<私>が観念的な教養主義にとどまるのに対して、世外民は古典から国土を分裂させられた中国民族のアイデンティティを求める真摯な姿勢がとらえられているとする。したがってその対話型式は、同じ東アジアの文化を共有しながらも、帝国主義国家と植民地国家のそれぞれの知識人の声が響き合うポリフォニー構造の追求にあるとみなしている。

第二部は佐藤春夫の「社会的小説」の方法の模索と、いわゆる古典回帰と呼ばれる彼の古典題材作品とが合わせて考察される。なぜ両者が同一のテーマ性にくくられるかということは、第六、七章にわたる古典題材作品の考察で明らかにされるのだが、それらの作品もファシズム化をたどる日本の政治に背を向けた現実回避にあったのではなく、実は「社会的小説」の方法の模索につながるものであることが主張されている。

第四章では時代の文化状況を概観した『文芸時評』(昭和2年)が考察される。この時評では、性格描写と文明批判が小説の骨格と主張されるのだが、ただ彼の主張はより文明批判に力点を置く「社会的小説」にあった。そのために『文芸時評』は、文学的状況が複雑に混迷する昭和2年という時期において自身の文学の方向性を整理する営為となるものであったとされる。第五章では『F・O・U 一名「おれもさう思ふ」』(大正15年)が佐藤の主唱する「社会的小説」の実践として考察される。この作品は主人公の意識が他者の対話形式によって形象化されてゆくが、この形式が当時文学界で流通していた心境小説を乗り越えて、「社会的小説」を達成する方法と自覚されていたという。作品の主人公の現実離れした言行が周囲の人物の対話によって明らかにされることで、「おれもさう思ふ」自意識の世界を浮かび上がらせているが、それはドストエフスキー的な自意識の形象化であるとともに、主人公に仮託される心境小説作家の現実離れの風刺ともなるとする。そして主人公の自意識が逆に社会の歪みを反照させることで「社会的小説」たりえていることを分析する。第六章では漢詩翻訳集『車塵集』(昭和2年)が考察される。ここでは漢詩が訓読されるのではなく、まったくの翻訳となっていることに注目する。漢文と和文の差異は、同じ字数でもそこに盛られた情報量に圧倒的な違いのあることにある。そこで佐藤はその差を埋めるために翻訳する和文に、古典和歌の修辞技法の本歌取りを大胆に採用することで、多義性をもつ和文をめざしたとされる。第七章では江戸の俳人と謝蕪村の「春風馬堤曲」を実験的に映画シナリオに翻案した『春風馬堤図譜』(昭和2年)が考察される。この作品では原作のもつ絵画的イメージの連鎖、一人称視点の導入という特徴に映画的手法を応用する方法がとられているとする。たとえば静画的絵画性に動きを与えたり、一人称視点を複数化することでまなざしの多重化をはかり、現実世界と幻想世界の交響、自意識の形象化に成功しているとする。したがってこの作品の実験性も佐藤春夫の社会的まなざしと方法の模索という意図をもつものであったとされる。

審査の結果の要旨

本論文は佐藤春夫の作品論研究ではあるが、従来の佐藤春夫研究が注目しなかった時期の作家営為を考察するものともなっている。その点からすると、作家研究にもなっている。しかも、その研究の焦点を「社会的小説」の方法の模索に置いたことで、当然のことながら、同時代の社会的文化的コンテクスト、あるいは台湾物に見られる帝国主義日本の政策的コンテクストとの照応を本論文の方法としている。その方法の必然性がポストコロニアル批評、カルチュラル・スタディーズといった現代の文学批評理論を積極的に導入する理由となった。本論文が従来の作品論、作家論を乗り越えようとする意欲をここに見てとることができる。

たとえば、第一部の台湾物の作品分析において、まず作家が文化人類学的な視点を獲得することで、台湾先住民社会のタブーと排除の論理をとらえ、その原因を日本帝国主義の政策にあるとする作品の構造分析から、少女あるいは女性の二重の疎外の悲劇をとらえる。そしてその疎外のメカニズムを通して帝国主義の植民地政策と植民地化される種族社会との鋭い拮抗という世界認識を分析している点は、佐藤春夫の「社会的小説」がたんに国内の社会が対象だったのではなく、帝国主義時代の日本内地と台湾外地の差別をはらむく社会>が彼の視野に入っていたことを明らかにしている。その分析はポストコロニアル批評による新たな解釈と認められる。また芸術家の自意識の形象化を扱った作品分析においても、同時代の心境小説論争、精神病理学の知識、ドストエフスキー文学の受容、それに日本国家のファシズム化などといった国家・文化・学問のコンテクストを媒介させながら、自意識の形象化が追求され、そしてそれを社会の異化の方法にすることで、この時期の佐藤春夫の文学は国家・社会・文化への批判精神に貫かれていることを明らかにした。

本論文は現代の文学批評理論をもちいることで、従来かえりみられることのほとんどなかった時期の佐藤春夫の作品群から新しい文学を求めて模索する作家像を描くことに成功している。しかし意欲的な論文ゆえの欠点も眼につくことはたしかである。あえていえば、現代の文学批評理論を駆使するがゆえに、理論を十分に内面化していない点もうかがえる。たとえば、ポストコロニアル批評をめざした台湾物の作品分析にあっても、帝国主義国家に属する作家が植民地化された人々の内面に入りこもうとする際の有効性が一面的に記述されるばかりで、本来矛盾するその限界が批判されていない点などは、理論の根幹にかかわる疑問点ともなりうる。またカルチュラル・スタディーズの方法論の応用についても、イデオロギーや人種、それに階級性を作家がどのように認識しているのかの記述が明瞭を欠いていることが惜しまれる。

ただこのような理論受容の大胆さがもたらす欠点も、佐藤春夫という作家と文学の評価に新たな知見を加え、より豊かな可能性を見いだした意欲あふれる本論文にとっては、問題となるほどではない。それよりも現代の文学批評理論を大正時代の代表的作家に遡行させることの可能性に挑んだ著者の積極的な姿勢は大いに好感もてる。その結果は従来の佐藤春夫像に新たな側面のあることを明らかにした。本論文はこのような新知見と方法論を学界にもたらした労作として高く評価される。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。